

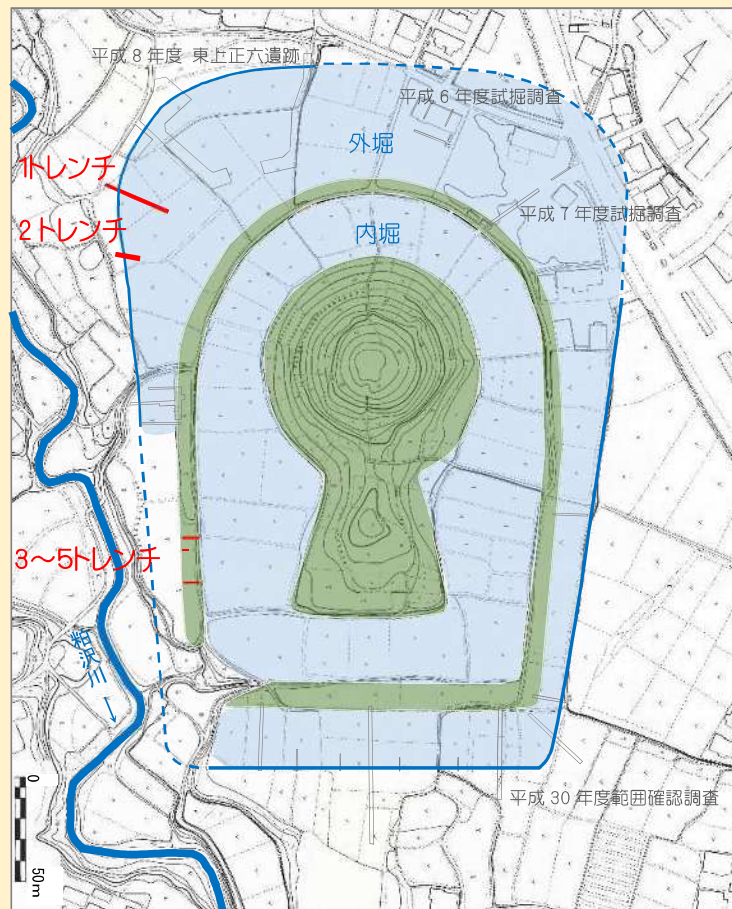
中堤の調査 (3~5トレンチ)

中堤上面の構造や、中堤の規模をとらえることを目的に、前方部西側の中堤の位置にトレンチを設定しました。中堤上面に施された玉石などの検出に努めましたが、河原石の出土はほとんどありませんでした。中堤上面は後世の耕作等により既に削られていると考えられます。地山層は、畑の耕作面から15センチメートルほどの浅い掘削で確認しました。中堤部分に盛土の構築は確認できませんでした。中堤の高まりは、内堀と外堀を掘削することで、構築していたと考えられます。中堤の高まりが残る小路や筆界の形状などから、前方部西側の中堤は、約8mの幅で構築されていたと考えられます。



内堀と外堀の間にある中堤
／幅約8m (南西から)

推定される古墳の範囲



(測量図:『群馬県史』資料編3附図1981より引用)

浅間山古墳の外堀の範囲は、これまで東上正六遺跡で立ち上がりを確認していましたが、中堤から大きく離れるため、部分的に外堀がはみ出す形状になると想定されていました。今回1トレンチ、2トレンチの確認調査により、外堀の立ち上がり範囲を確認し、外堀の形状は前方部へ向かうに連れて幅が狭く絞られることが明らかとなりました。墳丘主軸と反対側でも、平成30年度範囲確認調査による外堀のプランや、平成6年度・7年度試掘調査の事例とも外堀の形状が西側と合致し、左右対称の設計であることが分かってきました。

古墳の墳長は170mを超える巨大前方後円墳ですが、内堀と外堀を含めた古墳の範囲は約330mと極めて広大になることがわかりました。4世紀後半に築造された浅間山古墳の2重周堀は、東日本の中でも最古級の事例で、なおかつ畿内の前方後円墳にも劣らぬ規格性を備えた形状であったと考えられます。

令和5年度 浅間山古墳発掘調査報告会資料

会場：倉賀野公民館ホール 開催日：令和5年7月16日(日)

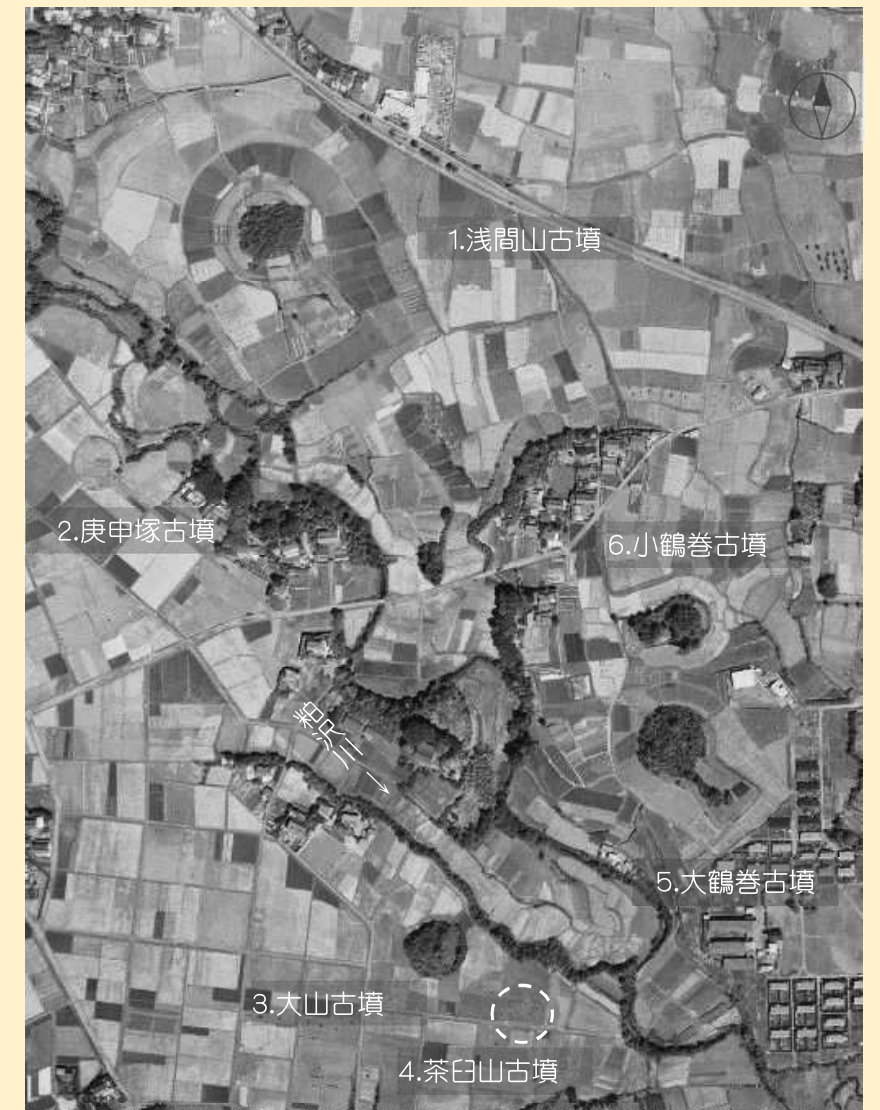
事業の概要

高崎市教育委員会では、国史跡浅間山古墳において、古墳の範囲を明らかにするための調査を令和4年度より開始しています。昨年度の調査では、古墳の外側にめぐる2重目の堀跡(外堀)や、内堀と外堀の間をめぐる中堤を確認しました。外堀が立ち上がる外縁ラインを復元すると、古墳の範囲は規格性を備えた大規模な形状になることが明らかとなりました。古墳時代前期、東日本の中でも破格な規模を有する浅間山古墳から、倉賀野・下佐野を中心とした地域に、畿内のヤマト政権と立ち並ぶ有力者の存在が考えられます。

浅間山古墳周辺の古墳分布

河谷が深く蛇行する粕沢川の両岸には、古墳時代前期から中期の古墳が密集しています。古墳時代前期の古墳が、狭い範囲に密に分布する場所は、東日本でもこの粕沢川くらいです。粕沢川両岸の下佐野・倉賀野地域は、浅間山古墳を盟主墳として、特別な地域であったと考えられます。

- 1 浅間山古墳(4世紀後半頃)
墳形:前方後円墳 墳長171.5m
出土品:円筒埴輪、形象埴輪
- 2 庚申塚古墳(4世紀後半頃)
墳形:円墳 墳径約50m
出土品:伝 銅鏡、鉄剣、鉄刀
- 3 大山古墳(4世紀後半頃)
墳形:円墳 墳径約60m
出土品:伝 銅鏡、石製模造品
- 4 茶臼山古墳(4世紀後半頃) 消滅
墳形:円墳 墳径約60m
出土品:伝 琴柱形石製品
- 5 大鶴巻古墳(4世紀後半頃)
墳形:前方後円墳 墳長123m
出土品:円筒埴輪、形象埴輪
- 6 小鶴巻古墳(5世紀後半頃)
墳形:前方後円墳 墳長87.5m
主体部:舟形石棺 出土品:円筒埴輪



1961(昭和36年6月)撮影
(航空写真: 国土地理院空中写真webサービスより引用)

外堀の調査（1トレンチ）

1トレンチは、後円部西側にめぐる2重目の堀（外堀）の立ち上がりを確認するために設定しました。おおむね小路がめぐる中堤想定ラインから約 63メートル離れた位置で、外堀の立ち上がりを確認しました。内堀と比較すると、外堀の幅は格段に広く構築していることが明らかとなりました。堀の深さは、遺構検出面から堀底まで 0.8メートルを測ります。現在の地表面から遺構検出面までは数 10センチメートルと非常に浅いので、堀の立ち上がり上面は、後世にかなり削られたと推定されます。したがって築造時の外堀の深さは、さらに深かったと考えられます。堀の埋没土層を観察すると、各層位ともおおむね水平に堆積し、中位あたりで浅間山が噴火した時のテフラ（As-B・1108年降下）が堆積していました。テフラが降下する前も後世も土層の乱れがほとんど無く、外堀エリアは聖域を成していたかのように静かに埋まっていた様子が分かりました。1トレンチからの出土遺物は、堀の底面で土師器甕や壺の破片が数点出土しました。埴輪片は1点も出土していないので、中堤の埴輪樹立の可能性は低いと推定されます。



外堀の埋没土層を観察すると、各層位ともおおむね水平に堆積し、中位あたりで浅間山が噴火した時のテフラ（As-B・1108年降下）が堆積していました。テフラが降下する前も後世も土層の乱れがほとんど無く、外堀エリアは聖域を成していたかのように静かに埋まっていた様子が分かりました。1トレンチからの出土遺物は、堀の底面で土師器甕や壺の破片が数点出土しました。埴輪片は1点も出土していないので、中堤の埴輪樹立の可能性は低いと推定されます。

外堀の基底面から出土した土器片／堀の中位に浅間山テフラ(As-B・1108年降下)が堆積(東から)



確認した外堀／奥は古墳の後円部（西から）



外堀の立ち上がり部分／礫の集石を確認(東から)

外堀の調査（2トレンチ）

1トレンチから続く外堀延長ラインの位置を確認するために、2トレンチを設定しました。小路がめぐる中堤想定ラインから約 44メートルの位置で外堀の立ち上がりを確認しました。1トレンチでは約 63メートルを測った外堀幅は、曲線を造りながら南へ向かい、2トレンチ付近で極端に狭まる構造が明らかとなりました。



外堀の立ち上がり検出面の状況(西から)



外堀が立ち上がった近い位置から、竪穴建物 1軒を確認しました。建物の床面から出土した土器は、S字状口縁台付甕の破片などで、古墳時代前期と考えられます。浅間山古墳の構築年代と近い年代です。

竪穴建物の出土状況(東から)



2トレンチ全景／奥は後円部(西から)